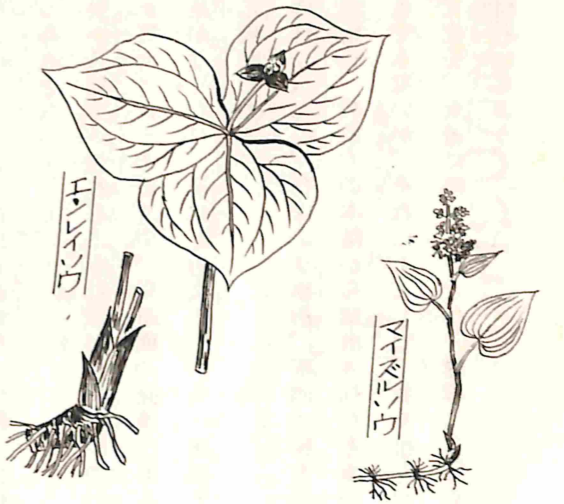


先人の遺産 を大事に

須崎正敏

随想



その昔、これと言ったスポーツのなかった時代、米俵や、庭石、米搗き臼など、若者等の力だめしに使用されたと言われている。この力だめしに使用されたと言われる大臼が、今も冷水町の旧家に残されている。高さが一尺四寸、直径が二尺四寸五分もある。この大臼、口伝にて嘉瀬観音様の山から伐り出されたものと言われている。

私等子供の頃の記憶からすれば、観音様一体の山々は、冬の稜に備える干草の草刈場であったことを思えば、信じがたいのですが、馬頭観音様のセンノ木『ハリギリ』や、嘉瀬八幡宮境内の原始林とも言うべき古木の密林、この下草にマイヅルソウの群落や、エンレイソウ、『ゴンバの実』、山の自然そのままに残されているのを思い合せると、この話にもうなづかれる。

去年（一九七九年）は惜しくも馬頭観音様のセンノ木（中山山脈を探しても見られない大木）が伐られたし、八幡宮境内の古木も年々伐

られ、昔の面影がうすれ、この地には珍らしい数々の下草も、絶滅寸前にある。村の史実を知るうえにも、また自然を守るためにも、先人の遺産をもっと大事にしなければと思われるのである。

この八幡宮境内に子供の遊び場の造成計画がされているとか、立木も下草も荒さない遊び場を造ってほしいものである。

※地勢上からみた嘉瀬八幡宮境内植生分布の一考察※
『マイヅルソウ』 山地や亜高山帯の針葉樹林下に群生する多年草で、山に入ると、この草を見るときは相当高度にきていることになる。

『エンレイソウ』 深山から、やや浅い山地の林内にはえる多年草で、地下茎は短く大きく真直ぐ下にのび、三枚の葉を輪状につけ、紫色の花を横向きにつける。（植物図鑑より）

『マイヅルソウ』 『エンレイソウ』が、嘉瀬八幡宮境内に自生していることの発見は、この植生は、山地の林下、または針葉樹林下に自生することになっているのに、平地の開発された区域内の八幡宮境内の一角に自生残っていることは、貴重な遺産であり、植生分布上貴重である。

この植生分布上からも、私達の嘉瀬は、生住民族が生活していた古代、嘉瀬は山岳地帯であったものが、地かくの変動に伴って低下したものと植生上から考察され、また津軽は往時十三湖が藤崎までのびていた内海であったころ、嘉瀬は湖岸まで、うっそうとしたヒバの森林地帯であつて、私達の先住者は、森に狩り、海に漁した生活を営んでいたであろうことは、八幡宮境内の森林下に植生する植物が発見されたことによつて証明できると考察される。（編集部）

随想

語り聞き

秋元 惣之進

嘉瀬本通りを五所川原方面に向つて、南端の西側、田圃の真ん中に約一反歩位の島状のポツンとした丘のような森がある。その中に薬師の祠がある。その森は俗称、薬師（ヤグシ）コ、薬師様と言つている。薬師コにまつわる由来を、堂守鎌田稲辰氏は語る。

その一、薬師の森

その昔、薬師の森の周囲は大きな沼で、薬師の森は沼の中の島であつた。現在の小田川が、この沼に通じていたと伝えられています。今から三百年程前、代官の役人が嘉瀬に来て、部落の人々を使役して、嘉瀬山の森林を切らせ、三百石程の木材を沢に積んで置いたそうです。ところが、それから大雨が一ヶ月も降り続き、積んであつた木材が、嘉瀬山の奥から全部流失してしまつたそうで、その流された木材が薬師コの大沼に沈んだということです。今でも田圃の底を掘ってみると、当時の木材が出てきますよ。

また、村で機織を織っていた村の若い娘が、洪水に流され、流れてきた木材の下敷になり死んだそうなの、その後、雨が降ると薬師の森付近の地の底から、機織を織る音が、パタン、パタン今でも聞えてくるそうです。

その二、薬師の祠

昔の道路も、今の五所川原通りの県道が無くて、古い道路は、飯詰中柏木道路の薬師ながれから別れて、馬攻（農協リンゴ倉庫北側）を通り現在の鎌田稲芳さん宅のうしろを回つて、薬師堂に通じ、嘉瀬の

庵寺コの横から八幡様の前を通つて、金木に出たそうです。

薬師の森は、誰も知らない間に、一夜のうちに、コツゼンと沼の中に島が浮んでいたそうで、村の人々は、あまりの不思議に、心配のあまり、何事も異変が起らなければよいがと、島に祠を建て祈つたのが薬師堂の祠のはじまりと伝えられました。

その三、老松

薬師の森にある二百年以上も経た老松は、昔々旅から旅を遍路した六分さんが、薬師堂にようようたどり着いたものの、旅の疲れから、お堂の前に倒れ果てて、この世を去りました。この松は、その時六分さんが杖にしていた棒が生いて、松の木になつたそうで、松は今も、私達に何かを語りかけたように、緑の葉をゆらしています。

その四、薬師コの清水

鎌田稲辰氏の先祖が、旧歴の七月七日、薬師の森のそばを通つたら森の中から、ピカッ、ピカッと一條の光るものが走りまわりました。森に近づいてみたら、光りは松の根元附近から出ていました。土を掘ってみたら、御光（神石）でした。

その晩、先祖が眠っていると、御光（御燈明）が枕元に光り、（吾れは、薬の神である、信心深い汝は勿論のこと、村の病める人を病氣からすくつてやろう。この森の岸に湧く清水を病氣の者は呑み、目の悪い者はつけるがよからう）と、御託宣になつたという。

信心深い先祖は次の日、早速小さな御堂を森の中に建て、神石を御神体に薬の神として奉つたのです。御堂を奉納して家に帰る途中、参道の端の地中から、不思議にも清水がコンコンと湧いていた。この清水を沸かして、病める人に吞ませると次第に快方に向いはじめ、目の悪い人につけたら、目やにが消えるようになりました。

それから旧暦の七月七日ごとに、先祖が薬師の神にお参りして家に帰ってみると、空の土瓶の中には、沸かしてある薬の湯が入ってあったと伝えられています。

昔は、薬師様の井戸の清水コで、境内に風呂場を作り、神の授けた神水として、沸し風呂に入り、当時は、村に定まった医者も居なく、薬師様の神水は良く効くと、遠くの村々からもにぎり飯持参で、沢山の人が清水コを貰いに来て賑いをみせたそうで、特に清水コは目ぐされ、吹き出物、切傷などに効き、つい近年まで薬用として部落の人々が汲みに来ていたものです。

薬師様の御命日は、旧暦の四月八日でしたが、薬師の薬水が湧いたのを祝って、旧暦七月七日に宵宮を奉納するようになりました。

御光石（神石）は約四百年も前に、薬師の森に鎮座したものと伝えられているところから、嘉瀬の本宮である、八幡宮よりも古くから神の住む森として奉られたものです。

私も、嘉瀬ふるさとを探る会に入会してから、今までは、ただ漫然と村の中を歩いていたが、道端の土の中にうず埋れている土石や、首の折れた石地蔵等が自然に目にとまるようになった。

鎌田稲辰氏が私に語り聞かせてくれた、薬師の神石（組み石）、地底に眠る埋れ木の調査に、私なりに研究することを昭和五十六年の、私の一つの課題として取り組む計画をたてている。（編集者追記）薬師の清水は、大東亜戦争前まで、当時嘉瀬の農家の燃料は、湿地から採取した草の根を乾燥した『サルケ』を主暖房、煮焚用として燃やしていたので、部落の人々の大半は、トラホームや、目脂の一つぱいたまった人が多く、小作農が多いので容易に医者の手にかかることがで

りも昭和三十六・七年に全国大会で優勝した時、舞台用に改良したのが今日の踊りとなったのである。

嘉瀬には、独特の盆踊りとして、逸子踊り（いっおどりともいう）というのもある。これはお盆以外は殆んど踊らないし、唄わないので惜しまれる。

近年成田善蔵さんがレコードに吹込んだので、ほっとした。後世に残せるからである。地下に眠る『嘉瀬の桃』も、さぞお喜びのことと思われる。

随想

奴踊りと逸子踊り

小山内 嘉一郎

県外で津軽の民謡を聞くと、まるで故郷に帰ったような気分になる。まさに民謡は心のふるさとである。民謡はいつ、誰が作ったか起源のはっきりしないのが多い。特に津軽民謡の代表格である、じょんがら節、よされ節などがそうである。

この三つはまた、歌う人によって、各々節回しに多少のちがいがあ。更に新、中、旧の区別など仲々複雑である。これだから他県人には歌われないし、地元でも若い人たちには敬遠される。

さて嘉瀬の奴踊りもその例にもれないが、昭和二十五年の春、民謡愛好者が集って、研究会をもったことがある。唄と踊りはどなたも知っているのに、起源については誰も知らない、丁度その頃、郷土史にも明るい木立民五郎さんの創作『奴踊りについて』を見たことがあった。曰く『今から二百七十年程前に、嘉瀬の開拓に励んでいた主人鳴海伝之丞を慰めるため、奴の徳助が作ったものである』云々と、その後は、これが定説になっている。

一方唄も踊りも、昔に比べると少しテンポが長くなったように思われる。昔はもっと単調であった。

昭和十六・七年頃、鎌田稲一さんが県下民謡大会で優勝した当時、歌ったのが今の唄で、いわば鎌田節といってもよいでしょう。また踊

ある。幼児期私は（皆さんもそうであったと思うが）そのモッコのエメージとして、漠然と非常に恐いもの、恐いものと感じ、それは化物（おぼけ）妖怪変化、魂（たまし）等の類だと思っていた。ところが、或ることで、モッコ（もうこ）の語原を発見した。それは『蒙古』のことだったのである。

文永十一年（西暦一二七四年）と弘安四年（西暦一二八一年）の二回、元の忽必烈を将に、九州の博多湾等に蒙古大軍が襲来、日本国未曾有の国難に遭遇した。時の鎌倉幕府執権北条時宗は、日本を属国にするための蒙古の使者を切捨てた事に端を発する難であった。

当時の蒙古（現モンゴル）の勢いは強く、中国全土は勿論、欧州の一部にまで勢力圏を伸ばしていた。ときあたかも日本では、宗教界に勃然と跳り出た日蓮宗の租、日蓮上人が我が日蓮宗を信じなければ、日本は国難に遇うと、辻説法中であった。世に云う元寇の役である。もし、このとき、日本の台風シーズンの台風が吹かなかたら、何百艘という蒙古の軍船が沈まなかったら、別称『神風が吹かなかたら』日本国は一変していたであろう程の国難であった。

このときから日本は神国であり、国難のときは神風が吹く、と教育され、愚かな私達は信じ込まれてきた。そして、大二次世界大戦には遂に神風も吹かず日本は負けた。

標題に戻ろう。津軽の子守唄にまでなった。その恐い、モッコ（もうこ）が、どのような経路で津軽に入ってきたのか、又その過程でなぜモッコが海から来ないで、山から来たのか？。語原は知ったが、そこまでは私は知らない、御賢明な郷土研究家のお知恵を拝借できないものであろうか。

随想

「津軽の子守唄」から

沢田 薫

眠るじゃ
眠るじゃ
眠るじゃ
眠るじゃ
泣げば
山がら
モッコア（又はモウコ）
来るじゃ



記憶は、さだかでないが、だいたいこのような唄を幼児期、祖母から、母から聞いて眠った追憶がある。この唄は今、現前と津軽の子守唄となっている。

さて、この子守唄の中の、モッコ来るじゃのモッコ、又はモウコで

遺蹟

木立久二

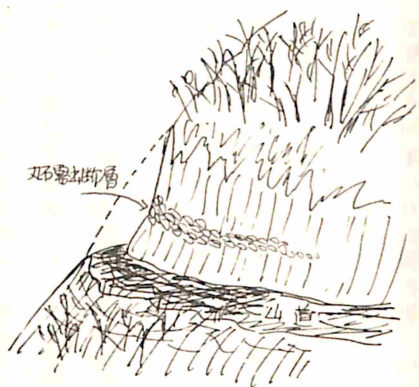
加清、加勢、嘉勢、嘉瀬、カヒの地名はいろいろ呼び方がある。しかし、これが本物であると言う断定出来るものは何に一つない。

昔ながらに嘉瀬のさまざまな言い伝えが、私共の脳裏にまだ残っては消えかかる記憶など、嘉瀬の古老達に、その話を聞いて思い出しもの、一体嘉瀬の部落は、いつ頃出来たのか、その起源を知ろうとする時、正確に記したものはない。あったとしても、それは、意識的に勝手に作りあげたのが嘉瀬の起源としているのかも知れない。

最近地方歴史について、あらゆる角度から研究され、書かれているが、嘉瀬についての歴史を的確にとらいたものはない。ただ第三者的に周囲の部落の歩みからの推察や、歴史書からの引用するに過ぎない。

現在の嘉瀬の見慣れた地形は、昔は今のようには整然と区画されたものではなく、小田川も蛇行、まわりは十三湖の水ぎわであったろうし、それは、中池(十川添)を深く掘ると、砂の中に混ってシジミ貝がたくさん出土する地層を見てもわかる。又地形的位置も東は山であり、狩ができ、まわりに魚が取れる湖で、古代から人間生活の営みがあった不思議ではない。

一昨年実地踏査した時に出た、葉師コノ環状列石も私の興味のひくところで、秋田県大湯環状列石と比較し、学問的に究明の要があり、人間が人為的に造ったことは間違いなく、歴史学者は知的に歴史を見るが、古代人の生活にしても学者の目にふれない、津軽独特の遺蹟がわがふるさと嘉瀬に一杯あると思う。



歴史スポット

妙光庵

妙光堂とも云え俗称上の寺と呼ばれ、明暦元年(西暦一六五五年)の草創と伝えられているが明らかでない。

一、御曼陀羅二幅(地極極楽懸軸) 一、御参銭函(明治四十四年木村泰碩) 一、参銭箱(天保六末年七月) 一、連銭代(当庵拾七世天保九年戌年) 一、釣鐘(文政六未歳工弘前坂本久右エ門俊宗造施主鳴海善七、酉松勘右エ門、太治、小治、巳之、釣鐘銘日 天

道是非知壮鉄失洪基清看庭上梅樹馥郁却多苦節咏梅疲) 但し妙光庵には、当庵拾四世と記るされる御曼陀羅と、当庵拾七世と記るされる連銭代があり、木村弥吉、木村弥助(担道)、弥五左エ門の三代から、現在の庵主木村清海氏まで二十一代に亘る経過をたどっているところから、相当に古く由緒ある庵である。

古い墓石

妙光庵の古い墓石は嘉永元年、嘉永四年、嘉永七年と、文化六年、文化七年から、天保四年、天保六年、天保十年のもの、もっとも古いものは寛政二戌年二月七日秋元家の墓石である。

明誓庵には、寛政三年、文化元年、文化四年、文政四年等があり、嘉瀬で最っとも古いと目される嘉暦(西暦一三二六年)の墓石がある。

中柏木で古い墓石は嘉永五子七月九日、天保八西七月二日、文政子十月玉井林右エ門(津軽出身の江戸相撲力士)等が見られる。小栗崎には寛政五年の伊藤家の墓石が古いものである。

(踏査記録)

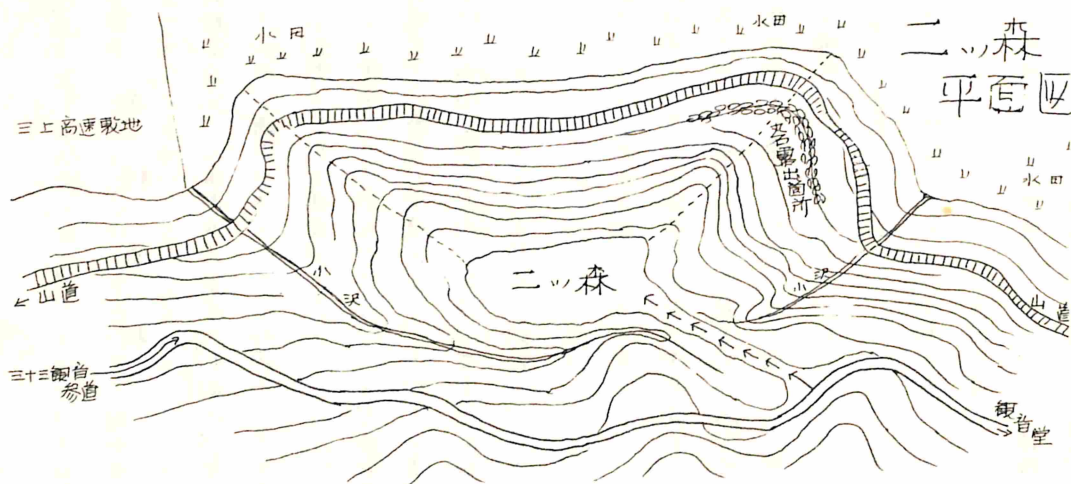
人工の盛か自然の森か

二ツ森丸石断層

立山の観音様一帯は平安末期以前に蝦夷人の豪族の一群が群居していたらうから、嘉瀬スキー場一帯の丘は、その遺蹟と推定される。その一つの根拠は、今は既に切り取られ三上高速プラント敷となった一ツ森であり、一ツ森は円形古墳形で、整地当時円形中央底に埋葬されたい棺があったと、整地した業者が語

っているところから、古代の蝦夷人豪族の酋長を埋葬した古墳跡に違いないだろう。立山(観音山)に至る三十三観音地藏参道の北側、三左エ門溜池に至る山道に接して三角方位ピラミット形の二ツ森がある。頂きは約六坪位の平坦地で、中央に小石を敷き詰め祠跡らしくなっている。この二ツ森、ピラミット形のところから土岐保正氏は、古代蝦夷人が人工的に造りあげた古墳跡とする説。木下清一氏の自然の小山を古代蝦夷人の自然山岳宗教の祭壇跡とする説で、今後の史蹟調査の大きな研究課題となっている。

二ツ森の中腹を切り開いて参道が走っている。この山道の法切断面に細長く丸形の小石が挟まれて一つの断層をつくっている。この地層の上と下の土質は同一土質で、この二ツ森が土岐氏説の人工的に盛土して造った時、たまたま小石まじりの土壌が積み上げられて出来た層か? また木下氏説の自然の小山か? 興国年間外の海(日本海)大津波以前の嘉瀬は十三浦につき出た一つの出崎であったことから、二ツ森中腹山道の切り面に表土している小石を、十三浦に波打ち寄せる岸辺の小石と断定するならば、古代の地形は、このあたりまで十三浦がのびていたことになる? またこの表土の小石は、山岳や渓谷にある角石でなく、水や波に洗われた丸石であるところから、往古二ツ森の直下に小田川が流れていたとも位置付けられる? が、盛土造成された森か専門的な土質調査と、往古の嘉瀬の地形の成立過程を調査しなければ二ツ森は解明されない。二ツ森が往古蝦夷人の古墳跡であるか、二ツ森の発掘調査を待つしかない。



「いごく穴」と「天明の飢饉」

木村治利

◎「いごく穴」と「馬頭観音」

嘉瀬駅から北へ二百メートル行くと、派立（畑地Ⅱアイヌ語）十字路にでる。そのつき当たりに、村人が「馬頭観音」とよんでいる保食神社がある。神社の由緒、建立年月日など不詳だが、祭神は「観世音菩薩」といわれる。

馬頭は、仏教の六観音の一つで、「馬頭観音」「馬頭大士」「馬頭明王」などといわれ、形象としては、身体が人で、頭が馬のものと、人の頭の上に、馬頭をいただくものがある。

馬頭は、転輪王の宝馬が四方を駆けまわって、敵を威伏することく、一切の諸魔をくじ伏す威力を表わしたものであり、胎藏界曼陀羅（まんだら）の観音院の一尊をなしている。悪人怨家（えんか）降伏のための修法の本尊とし、また民間で馬匹の無病息災を祈る風もあるところから、保食神社を「馬頭観音」とよぶようになったのかもしれない。

神社の傍に「いごく穴」（語源不明）がある。地獄絵図といわれる天明の飢饉に、村人は全滅近く餓死したといわれ、毎日餓死者が道路にあふれ、埋葬するいと間もなく、村の各所に穴を掘って埋めた。

これが「いごく穴」だと伝えられている。
昭和五十四年八月の調査時、「いごく穴」は腐れかけた丸太で四角にふちどられ、直径二・五メートル、中は四〇センチくぼんでいた。

◎天明の飢饉

昭和五十五年は、春から秋へ直通した夏のない年であった。

この冷夏は毎日東風が吹き荒れ、薄墨を流したような低くたれこめた空から、ときたま冷雨がばらつく日々が多かった。このため稲の出土が遅れ、結実せず、青立ちのままだった。

青森県の稲作況指数四十七、大正二年以来の大凶作となった。とくに下北や南部地区がひどく、九〇%の稲が皆無作という状況であった。金木町では作況指数二十七、三分の一が皆無作となった、とくに嘉瀬地区の萩元、駒留、雲雀野は梵珠山と大倉岳の山合いで、東風の通風口に位置しているため、皆無作が多かった。また、前年区画整理を実施した地域は、土質の状態がわからず肥料配分にも関連があったらしい。東風は植物を病気にさせる「病ませる」というからヤマセ、と古老たちは云う。

この冷夏の天気図が、天明の飢饉の始まりとなった天明二年の、天候とまったく同じであるというから驚ろく。

天明の飢饉の大凶作は、今から二百年前天明二年（一七八二年）から始まり、同三年、四、五、六、七、八年と続いた。

当時、津軽藩の人口は二十四万人、このうち三年から五年にかけて餓死者は実に十一万人、生活苦から秋田、山形、新潟へ逃散した者六万人といわれる。しかも逃散した人々も五人のうち四人は死んだとつたいられている。

篤学者工藤白龍氏（弘前の豪商）の津軽地理考の序に「天明三癸卯みずのとう年、未曾有の大凶作として、人民多く餓死し、家屋多く焼失、田地荒野に変じ、村里空屋となり、往古の地理己に亡ぶ」と述べている。

この「いごく穴」を取囲むように、三本のせんの木はりぎら（刺桐）がそびえ、いづれも高さ二〇メートル余、周囲三メートルから四・七メートルの大木ばかりで、樹齡二五〇年ぐらいと推定された。

せんの木の材は、つやがあって美しく工作しやすく、大きな板が得られるので、下駄材、家具類などに最適で用途も広く、山桐ともよばれている。これほどの名木は、中山山脈をどんなに探しても見つけないことはできないといわれ、祖先の人々が、子孫のため役立つことを願い、植えたものであろう。

いわば、せんの木は嘉瀬の歴史を物語る表徴でもあった。
「いごく穴」の前には派立通り、横は小栗崎道となっているが、二つの路傍には、地藏さま、百万遍塔、供養塔などが建てられている。

地藏さまは、もともと民衆の信仰を集め、村はづれ、曲り角、坂道などによく見受けられるが「悪霊退散」「幼児守護」「行路安全」の神と信じられ、凶作との関連もあるともいわれる。

百万遍は、浄土宗から派生した念仏宗であり、「南無阿弥陀仏」を百回唱えることにより、二世安楽往生できるといふ民間信仰である。

「いごく穴」にまつわる保食神社（馬頭観音）、せんの木、地藏さまや百万遍の民間信仰を考え合わせるとき「餓死者の供養とともに、二度とこんな悲しみが起らないよう、村人をお守り下さい」という祖先の切なる願いが、こめられていることを感じないわけにはいかない。

このように二、三年の飢饉の惨状が津軽の風物を一変させたことを嘆いているが、天明の大凶作は更に、四年、五、六、七、八年と続くのである。無情な天災続きはその惨状も想像に絶するものがあった。

◎天明二年

天明の飢饉は、安永年間から不作のあとをうけていた。

即ち、安永三年（一七七四年）同五年、七年、八年と続き、年号が改まって天明二年と、連続的にまったく息のつくひまもないほど、農民は凶作に悩まされた。

天明二年の春、不順天候が続くすでに凶作の兆候が見られた。夏中大雨と東風が続き、冷たい日が多く綿入れを着るほどであった。

六月十七、八日豪雨、洪水、霰など降り、七月十八、九日またもや大暴雨となって洪水が起った。八月にも霰が降り、岩木山から多量の硫黄が噴出し、噴煙を吐き出した。九月になってようやく出穂したが、病害虫が発生、稲は枯死し四分作となり、元禄以来（一六九五年）の大凶作となった。

この年の春、津軽藩では米を江戸及び大阪へ二十万俵づつ廻送し、加賀にも三万俵売ったので、領内には全く米がなくなり、飢民は四方に流浪して食を求めた。それでも壮健な人々は山野の草や木の根を掘って食をつないだが、塩を求めることができず、餓死するものが続出した。餓死者が路傍に放置されているので、犬が屍体を喰い荒した。

「漆沢の次助と申す者の所で、子供の泣き声がするので、隣家の人が行って見ると、まだ生きています子供の股へ食いついていた」などの記録が残されている。

ころころと残っている、夫婦か、あるいは親子なのか、縁故者もなく骨となつたらしい。

重い年貢を運命に背負い、牛馬のようにただ働らいて来た百姓たちを、飢餓に追え詰め救うもののない世界である。これは天災ばかりではなく、社会構造から百姓たちに困苦の大半が集中せられて、人間が死人の肉を切取って食うまでになつたのである。

五穀は何一つなく、百姓たちは山に行つては、草木の根、葉その他菓糠を食べた、しかしそれもいつ迄も続かなかつた、犬、猫、牛、馬、鼠、いたちに至るまで力の限り取り食へた。じつと空腹に耐えながら、寝ていることもできず、道路に出る、そして倒れる。

すると、一人二人とかけよつてきて死人の肉を切取って食うことになる。

「飢えてやせおとろえ、自然と死んだ肉は、既に腐りかけているので、味が悪い、生きた人をうち殺して食う味は美しい」ということになり、弱つた人を殺して食うことが多くなつたと、記録されている。

糧になつた品

捨て藜、あざみ、大ぶどうの葉

しいな餅、そば餅、麦餅などに山ごぼうの葉を入れる

馬用の刈り取つておいた「よもぎ」「すずこ」藍の葉まで食つた。

菓の節の部分で炒つて、たたいて粉にして餅をつくり、赤松の荒皮を削りとつて、煎つて粉にし、それを入れてたべる。

(以上参考津軽ケガジ物語による)

× × × × × × × ×

天明二年から天明四年と打ち続く津軽の凶作による飢饉は、天明五年飢饉跡の津軽を旅した旅人の目にも異状に見いたことだろう。次にその記行文の一節を掲げて当時の面影をしのんでみよう。

宝暦四年(西暦一七五四年)ごろ三河国生れとされ、天明三年郷里を出て、信濃、越後から東北の旅にのほり、エゾの国(北海道)まで、旅に明け旅にくれ、文政十二年(西暦一八二九年)出羽国角館で逝するまで郷里に帰らず、生涯を旅に終いた旅行家、菅江眞澄の、天明三年の津軽大飢饉のさまは、その記行文のなかに、なまなましく記るさ

れている。まず、当時のいま私達が住んでいる津軽および嘉瀬地域の天明飢饉をさぐるにあつて、次の記行文の一節を掲げてみる。

天明五年八月三日

出羽、陸奥の国境にある堺明神(一社は津軽領、もう一社は秋田領内にある)ここから陸奥国耶麻郡東日流花輪庄赤石組といい、荒磯づたいに進んで、木蓮寺坂を下る。まだ日が高かつたが黒崎(西郡岩崎村黒崎)という磯辺の宿に泊つた。

天明五年八月六日

ここ赤石の港、舟が難破して、あちらの浦、こちらの磯辺に舟が沈み、多くの人が死んだと大変な騒ぎであつた。まもなく刈り取りしよとする田の面の稲穂が風のため白くなって倒れていた。

舟の遭難とあわせて一昨年(天明三年)の飢饉にもまさる損害であらう。

『私達ア、前世にどたらだ罪があつて、こたらだ目に合ねばまいねあやだば』と、声もなく、男も女も、皆んな泣いていた。

天明五年八月十日

鯉ヶ沢を朝早く出立する。浮田を出て、卯の木、床前(森田村)という村の小道をわけてくると、残雪が消え残っているように、草むらに人の白骨がたくさん乱れ散つていた。あるいは、うず高く積み重なつている。頭骨などの軀がついている穴ごとに、薄や女郎花が供へられている様は見る心持がしない。

『あなめ、あなめ』と、ひとりごとをいったのを、通りしがりの人が聞いて、

『見でける、これア、みんな餓死した者の屍だぢや。天明三年の冬から四年春までに雪の中さ行き倒れした者のながにも、まんだ息のあつた者がたくさんいましたぢや、したども行き倒れ者がだんだんと多くなつて、重なり伏して道をふさいでしまい、行き来する者ア死骸を踏みこえ、踏みこえ通りしたぢや。』

夜道や日ぐれになれば、あやまつて死骸を踏んだり折つたり、腐れだ死骸の腹などさ足をとられだり、臭い匂ア大変だつたぢや。

まだ、生きでる馬こと、首さ綱かけて、梁さ結して、小刀で馬の腹ア裂いて殺し、流れでる血をとつて、あれこれ草の根っこを血ど一諸に煮で食つたし、荒れ馬ア、馬の耳さ熱い湯入れて殺した。その馬の骨ばたき木さませて焚いだり、エサにして犬をとつて食つたりもした。したばて、馬だの犬だの、草の根っこも食うものなぐてしまて、何んも食う物ねい者ア、自分で生んだ赤子、また、弱ててしまて兄弟だの家族、病気で死にかけでる人ごと、まんだ息のあつたぢ、小刀で刺

して殺し、人の肉食つて飢いをしのいだりした。人の肉食つた者アつかまつて処刑された者もあるども、人の肉食つた者の眼ア、狼みたくざらざらど光る眼ねなり、馬食つた者ア、みんな顔色黒くなつて、いまでもごら辺の村にたくさん生ぎのびてしましぢや。

聞いた話だばて、この在がら、弘前近くさ嫁に行つた女ゴ、在所に居る母親アこの飢饉でどうしてるべ、生ぎでるべがど、まる一日かがる道のりを、夕方近くなつて着いで、母親が達者でいることを見て喜んだが、その晩、母親ア常談ね、お前アなんほ肥いでらばな、食てみだら、美味アべな、と言つたもんだどごで、娘アなんほ母親でもおそろしくなつて、母親が寝たしぎね、夜の明けぬうちに、弘前の在さ逃げ帰つたと言ふことあつたそうでしぢや。

私も、死ぬるものなら苦しなめで、死んでいと思つたこと何回もあつた、菓ア搗いで餅ねし、ワラビの根ッコ掘つて食て、今まで生ぎできましたぢや。今年も先日の暴風で、稲だの豆だのやらいでしまつてまんだ飢饉になるね』と、泣きながら話し、別の道に去つて行つた。

森田、相野、木造を過ぎて岩木川に出、綱を曳いた渡し舟で岩木川を渡り、この夜は五所川原というところに宿をとつた。

天明五年八月十九日

大浜(青森市)から、浜路を行つて、うとうまいのかけはし(浅虫と久栗坂の間の海上にそびいたつた険阻な岩壁にかけた棧道で、巾七八寸の板をわたして岩壁をつたつて通つた、これを当前の橋といつた)を見物にいこうとでかけると、鍋釜を背負い、あらゆる家具を持ち、幼児をかかえた男女が、道もあふれるほどやってきたのに合つた。